

ところで、この銅像の原型も楠公銅像と同様、木彫教官のみで作った。

洋風彫刻家である藤田文蔵は明治二十三年十二月以降植田榮齋が京都清水に建設を計画していた西郷隆盛銅像の原型制作を手掛け、キョソーネ筆の肖像画および西郷の関係者の意見に基づいて塑造原型を完成させた。その仕事は榮齋の死去によって宙に浮いてしまったが、原型はその盡手元であったので、藤田は当然上野の銅像の原型としてそれが活用されることを期待したのである。しかし、実現はしなかった。それに関して藤田は「塑像家藤田文蔵氏」『新小説』第四年第三卷。明治三十二年二月五日）に次のような興味深い談話を残している。

丁度其時上野へ西郷翁の銅像を建てるので廣く其製作の募集が出たので、自分も是迄に爲たのであるから斯の機を幸ひに是を持出したのです。同時に大熊氏も造つて出す、其からもう一個誰でしたか應じた者がありません。審査も首尾よく済んで、僕は其時の美術學校長岡倉覺三氏から君の出したのが彌々採用されたといふ報告に接しました。

物事は不思議ですね、其頃日本の美術界に西洋主義と日本主義との大衝突があつて小山正太郎、淺井忠等の人々が大分氣焰を吐いた事がある、然し詰るところ日本主義の方の旗色が盛んで、其名残は西郷翁の像も日本の木彫で爲る事になった。で岡倉さんが或日自分を呼んで、是々の始末で仕方が無い、就ては君も彼だけに苦心を爲て造つた物であるし、審査の上君のを採用するに極つたのであるから、何うか彼の肖像を學校へ譲つて呉れまいか、費用は何程でも出すと言はれたが、僕は其は御免を蒙ると斷然御ことわりを爲た、岡倉さんは今一度君も考へて置いて呉れと其儘に別れて了つたので、其後彼方からも言出さず、此方からも返事を爲すに過ぎたが、學校で高村光雲氏が木彫に着手したとは聞きまし

た。

なお、同誌には藤田の西郷像（胸像、塑造）と上野の西郷銅像の写真が並んで掲載されている。

7 日蓮上人銅像雛形

現在、博多東公園にある日蓮上人の大銅像（*copy*）は、明治二十一年に福岡県下の日蓮宗徒（代表佐野前助）によって建設計画が始まり、同三十七年十一月に落成したが、製作の大半は本校が担当した。まず、この二五年に該銅像の雛形製作が本校に依頼され、その際、校友会が懸賞図案（下図）募集を行い、下村觀山作の右手に安國論の巻物を握り、左手に数珠を持つ日蓮像の図案と、島田佳矣作の台座の図案とが一等に選ばれた。雛形制作の担当者となった竹内久一はさらに細かい考証を加えて図案を作り、それによって木彫の雛形（150）を製作。岡崎雪声がこれを鑄造した。二十七年に至り三丈二尺の銅像原型（木型）と台座型の製作が本校に依頼され、同じく竹内久一が翌二十八年に本校内の製作場で銅像原型の製作に着手し、翌二十九年六月に完成。次いで岡崎雪声が本校内の鑄造場で頭部と両手首の鑄造に着手し、同三十一年、美術學校騒動後にこれを完成。胴体の方は佐賀の谷口鉄工所が分鑄法によって鑄造した。当時は近世最大の銅像として世の注目を集めたもので、その製作技法等については『福岡市東公園日蓮上人銅像』（中牟田佳彰・田中一幸・木下禾大共著。昭和六十二年。西日本新聞社）に詳かである。

関連事項

① 二十五年経費と校長謹責

本年度経費の新営費に關し、翌二十六年六月二日に岡倉校長は譴責を受け、會計主務官安井一匡は罰俸を科せられた。兩者の履歴書にはそれぞれ次の記載がある。

「明治廿五年度東京美術学校新営費ノ項ニ於テ豫算令達額ニ對シ金百五拾三圓六拾三錢超過ノ仕拂請求書ヲ發シタル段職務上不都合ニ付譴責ス 文部省」

「明治廿五年度東京美術学校新営費ノ項ニ於テ帳簿ノ記載ヲ誤リ豫算令達額ニ對シ金百五拾三圓六十三錢超過ノ仕拂請求書ヲ調定シタル段職務上不都合ニ付月俸十分ノ一ノ罰俸ヲ科ス」

なお、この新営費については記録が現存しておらず、金額、用途は不明である。

② ババリヤ万国美術展覧會

明治二十五年、ババリヤ（バイエルン）・ミュンヘンで開催された同展覧會に際し、日本政府は賛同の要請を拒否したが、本校の岡倉校長は独自に出品の勞をとり、協力した。その間の詳しい事情は不明であるが、新聞の中には二三、この件を採り上げているものもある。

○我繪畫歐洲美術中に加はる

是まで歐米多數の碧眼は東洋の繪畫を見て美術外に置きたるが近頃其風韻と意匠の遙に油繪の上に駕することを覺り獨逸聯邦のバ、リヤにて今年八月に美術展覧會を開設し我繪畫をも陳列するこ

とを申來り是ぞ我繪畫の歐洲美術中に加はりし初めなれば岡倉美術學校長は東洋繪畫の妙趣を彼等に教示する爲め自費を以て渡航する筈にて夫々へ通知ありしを以て京都にては幸野梅嶺、原在泉、岸竹堂、今尾景年、望月玉泉、土佐光武、森川曾文等の諸名手が揮毫して出品する由なり

（明治二十五年四月二十四日『大阪朝日新聞』）

○獨逸萬國美術博覽會

同會は本年秋季開設する筈にて我政府にも曩に出品を申來りたるも賛同せざりしか一己人にて出品せんとせしものもありて既に東京美術學校教員及京都の畫工等より數十點出品することに決し兩三日前便船にて回送したりと云ふ

（明治二十五年五月二十一日『経世新報』）

岡倉校長は西歐で日本画が美術として正当に評価されることを期待して出品に協力したものと思われる。本校からは川端玉章筆「海辺漁家ノ図」「葡萄栗鼠ノ図」「山水ノ図」、橋本雅邦筆「夏景山水ノ図」、狩野友信筆「羅漢ノ図」等を出品した。岡倉校長は渡欧も計画していたようだが実現しなかつた。明治二十六年に至り、ババリア国王から岡倉校長に対して「ハイリケ・ミッハエル」第二等勲章の贈与があつた。